



Title	在日国際結婚家庭の言語・文化継承に関する研究 : 中国・フィリピン・ブラジル出身女性を中心に
Author(s)	敷田, 佳子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56021
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (敷 田 佳 子)	
論文題名	在日国際結婚家庭の言語・文化継承に関する研究 ——中国・フィリピン・ブラジル出身女性を中心に
論文内容の要旨 本研究では、結婚移住女性に焦点をあてつつ、国際結婚家庭内における言語・文化継承の実態について調査・分析を行った。リサーチクエスションは以下の二つである。1. 結婚移住女性の来日動機や来日前後の教育・生活経験を描きだし、出身国やエスニシティごとの差異あるいは共通点について明らかにする。2. 結婚移住女性および日本人夫やその家族、あるいは子ども本人の家庭内の言語・文化選択への関わり方とその選択がもたらす影響について明らかにする。 まず、1章においては、研究の社会的背景について記述した。国内の国際結婚数は、バブル期の1980年代後半に急増し、現在は減少傾向にあるものの全婚姻数の3%ほどを占めている。さらに、「夫日本人・妻外国人」という割合が8割程度を占めていることから、これまで多くの外国人女性が日本に結婚移住し、子どもを育ててきたという実態があることがわかる。本研究では、結婚移住女性の経験と子どもの教育とを結びつけ、家庭内の相互作用およびより広い周辺社会の影響に配慮した上で、教育社会学的な視点から国際結婚家庭の言語・文化継承に関する分析を試みた。対象は、比較的高学歴をもつ中国・フィリピン・ブラジル出身女性が母親である家庭（合計23家庭）で、インタビュー調査を中心とする質的調査を行った。インタビューは母親をはじめとして、日本人夫、子どもに対しても実施した。 2章では、まず1節で結婚移住女性の主体性と社会文化的制約などに関する先行研究、つづく2節では言語・文化継承や文化的帰属意識の問題など、多文化背景をもつ子どもの教育に関する先行研究を検討した。その上で3節においては分析の視点を明らかにしている。すなわち、本研究では、女性と夫・子どもおよび日本人家族の影響にも着目し女性の主体性と社会文化的制約のせめぎ合いを描きだした。その際、とくに言語・文化継承実践に焦点をあて、家庭を「両立志向」と「日本志向」という二つのカテゴリーに分類した上で、家族の異文化接触経験や子どもの学校適応・教育達成について分析を行っている。 3章では、結婚移住女性の語りから女性の出身国・エスニシティと生活経験について分析した。女性が結婚を機に移住した場合は、結婚移住女性と日本人男性の出会いのパターンは出身国に関わらず非常に似通っていた。しかし、単身で来日した場合の女性たちの来日動機には、日本政府の外国人受け入れに関する施策と結びついた出身国ごとの傾向がある。また、女性たちの日本での生活経験や母国人ネットワークの築き方にもそれぞれの国・エスニシティの特徴が見られる一方で、日本での生活を通して女性たちが文化変容を経験し、境界空間（liminal space）において葛藤状態にあるという点では共通していた。 つづく4章では、6つの事例をとりあげ、家庭における言語・文化選択や進路選択について詳細に描き出した。それらの事例からは、女性の出身国や学歴が共通していても完全に異なる選択をする家庭があると同時に、女性の出身国・学歴が異なる場合でも、非常に似通った言語・文化選択を行っている家庭があることが明らかとなった。そうした選択は、夫婦・家族の関係性のあり方と相関しているとともに、子どもの教育達成や文化的帰属意識にも影響を与えていた。 5章では、4章でとりあげた6事例の対象者全体における位置づけを明らかにしつつ、家庭の言語・文化継承を決定づける要因とその影響、父母学歴と子どもの教育達成の関連について考察した。そこで見出されたのは、女性の人的資本よりも、父の経験や学歴等が家庭内言語・文化の選択および子どもの教育達成に影響を与えているということであった。また、国際結婚家庭内の言語選択は「将来その言語が子どもの役に立つかどうか」という合理的な価値判断よりも、「家族規範」——日本人家族の感情を伴った価値観とでもいうべきもの——に左右されやすい、不安定なものであることが明らかとなった。母親の母語・母文化継承が困難である背景には、日本国内においていまだ日本語以外の言語・文化継承の重要性が十分に認識されていないという状況があると考えられるが、「コスモポリタニズムはエリート階級の特権ではない」とするオーディナリー・コスモポリタニズム概念はこうした現状打開の契機となりうるだろう。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (敷 田 佳 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	木村 涼子
	副 査	准教授	高田 一宏

論文審査の結果の要旨

本研究の対象は在日の国際結婚家庭である。設定されたリサーチ・クエスチョンは以下の2つである。1. 結婚移住女性の来日動機や来日前後の教育・生活経験を描き出し、出身国やエスニシティごとの差異・共通点について明らかにする。2. 結婚移住女性および日本人夫やその家族、あるいは子ども本人の家庭内の言語・文化選択へのかかわり方とその選択がもたらす影響を明らかにする。対象として選定したのは、中国・フィリピン・ブラジルから結婚移住してきた女性たちとその夫・子どもたち、合計で23家族である。

本論文は5章から構成されている。1章で研究の社会的背景について概観したあと、2章で先行研究の検討を行った。そのうえで3章では、女性たちの語りから、まず女性らの出身国・エスニシティと生活経験との関連について分析した。続いて4章では、6つの事例（各国2家族ずつ）を取り上げ、家庭における言語・文化選択や子どもの進路選択の状況を詳細に描き出した。そして最後の5章では、4章の6事例の位置づけを明確にしつつ、家庭の言語・文化継承を決定づける要因についての検討を行った。その結果導き出された知見は、以下のようなものである。

まず、上記1について。結婚移住女性と日本人男性との出会いのパターンは、出身国の違いに関わらず非常に似通っていた。ただし、単身で日本に来日した女性たちの来日動機には国による違いが認められた。また、女性たちの日本での生活経験や同国人ネットワークの築き方に、国によるバリエーションが観察された。2について。女性の出身国や学歴が同じでも、完全に異なる選択を行う家庭がある一方で、出身国や学歴が異なっているにもかかわらず、似通った言語・文化選択を行っている家庭があるという事実が明らかになった。家庭内言語・文化の選択および子どもの教育達成に関して、女性が持ち込む言語・文化、および教育経験や専門職経験といった人的資本の影響は思いのほか少ないのが実態であった。言語・文化選択は、「将来子どもの役に立つかどうか」という合理的な価値判断よりも、それぞれの家の家族規範、あるいは日本人家族の感情を伴った価値観に左右されやすい、不安定なものであることが明らかとなった。

本研究は、これまでほとんど顧みられることのなかった国際結婚家庭の教育にかかわる問題を、3ヶ国の結婚移住女性やその家族に対するインテンシブな聞き取り調査をもとに生き生きと描き出したというメリットを有するものである。比較分析の手続きもしっかりとしており、見出された知見も斬新性を有している。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。